



この学校に元治さんが赴任したばかりの時、特別支援学級は、個別学習が中心でした。元治さんは6人のクラスを担任しました。高学年が多いこともあってか「勉強なんかする気ない」というちょっと斜に構えた子どもたち。

楽しいことを子どもたちとしたいと思った元治さんは、かこさとしの『からのパンやさん』を子どもたちに読みました。子どもたちは食いつきます。「その飛行機パンがええなあ」と言う子どもたちに、元治さんはパン作りを提案します。

「そんなにつくれるわけないやん」と言う子どもたち。でも元治さんは「つくれるよ」「ええっホンマに？」と驚く子どもたちに「つくるよ」と一言、そうしてパン作りがスタートします。

元治さんの実践には、「子どもたちだけだと尻込みしている（もしくは尻込みしそうな）ところで、ぐっと励ます」という関わりがあります。子どもの「やりたい、けれど無理なんじゃないか」という気持ちに「ムリムリ」という表現になっている時（特に、できる、できないが気になる時期、他者の目が気になる時期はそうなりがちだと思います）、「やりた

い」気持ちを感じ取って、そこをしっかり励ましていくのです。

自分たちでまずは絵を描いてどんなパンがいいか考え、実際にパンを作り、おいしかったのもっと作りたいと話し合い、交流学級担任の先生や参観日で学校に来た保護者にも食べてもらいました。

この時、子どもたちはこれまでやってこなかった活動を通じて、とても思い出に残ったようだったこと。この時期の子どもたちには、子どものねがいを読み取って、まずは先生から提案し、励ましていくことが大事だったので。

おかし（からのパン屋さんシリーズのお菓子屋ですね）を作って職員室に持っていく時にも、いろいろな人に話すのが苦手な子どもは、何度も渡すためのことを練習し、「めっちゃドキドキする」。ここでも元治さんは、「でもしようがないやん。渡したいんでしょ」と子どももやりたい気持ち言葉を言葉にして伝えます。「渡したい」「じゃあ、行くしかないね」のやりとりの末、クッキーを渡すことができました。やりたい、でもめっちゃドキドキする、という二つの気持ちのなかでゆれている時に、やってみよう、と励ますのです。

これは個別学習で今までできていたことよりむしろかしいことにとりくませるのとは全然ちがいます。「したい」という気持ちが出ると、そして、みんなで不安やドキドキも共感できる、そのなかでこそ成立している学習なのです。

**姿を変える大豆**

教科書に載っていた「姿を変える大豆」。元治さんは、これは楽しい教材だと思い、子どもたちに大豆の学習を提案します。でも子どもたちの反応は「はあ？」。実は、豆が好きなのは1人だけ。5人の子どもたちは好きではありません。元治さんは、もちろん知っています。学級の子どもたちみんなが好きなのを入り口にすると学習にとりくみやすいのは確かですが、最初はちよっと抵抗があっても、やってみたらおもしろい教材ということがあります。学ぶにつれて子どもたちが夢中になり、子どもたちの方がかむしろノリノリになって学習を進めていく…、学びが深まっていくと、こういうことが起こります。

大豆の学習の時にも、炒り豆、煮豆、きな粉、高野豆腐、豆腐、もやし…と、

# ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学  
**川地亜弥子**  
かわじ あやこ/研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。ステイホームで髪を切らなかつたら、ものすごく伸びました。

## 第7回 一人ひとりが輝く みんなで学ぶ授業をつくる

一人ひとりを大事にして、みんなで学びたい：あたりまえに思えるねがいですが、今の時代にはこれがなかなかむずかしいのです。個別に、効率的に、力がついたことを確かめられるような指導を求められるからです。しかし、それでは子どもたちがしんどくなるばかり…。

子どもたちはなぜ学校に来るのでしょうか。いろんなことができるようになりたい、というだけでなく、自分を出しながら、友だちと一緒にいろんなことに挑戦したい、という気持ちが大きいと思います。そこに応える実践について、兵庫県元治智子さんの特別支援学級での取り組み、特に子どもとのやりとりから考えてみます。

### 子どもの「したい」を励ます

元治さんは、子どもたちが自分たちのもっている力をしっかり発揮できるのは「したい」と思う学習内容の時だと言います。子どもから「したい」と思う時に力がわいてくるし、力がわいてきたらうまくいくことが多く、しかも自分の予想以上にうまくできると、「自分って、なかなかやるじゃん」と顔が輝いてくると